

2026年度 住宅地盤主任技士（調査部門） 正解および解説

問題	正解	解 説
1	2	設問2：浜堤は海進時ではなく、海退（海水準低下）に伴う海岸線の前進過程で形成される。
2	2	基準書 p.22 参照。
3	1	含水比 $w = \{(164-119)/(119-55)\} \times 100 = 70.3\%$ 、湿潤密度 $\rho_r = 310/196,000 = 1.58\text{g/cm}^3$ 。
4	3	試料 B ($U_c = 0.15/0.04 = 3.7$) は、均等係数の範囲 $U_c < 10$ から「分級された」に区分される。
5	4	設問4：コンシステンシーは細粒土がもつ特性である。
6	3	設問3：膨張→収縮が正。
7	4	設問4：小規模建築物は液状化による被害事例は比較的多い。
8	2	設問2：河跡湖は見られない。
9	1	設問1：転圧機械のような効果は期待できない。
10	2	設問2：安全率 3.0→1.5 が正。
11	4	設問4：住宅基礎の支持層とする硬質層は地質図では省略されることが多く有効ではない。
12	1	A：温度応力や乾燥収縮、鉄筋腐食。B：施工時に生じたコールドジョイント。C：背面の偏土圧。D：塩害や中性化の鉄筋腐食。以上より地盤起因はCのみ。
13	3	設問1：土質の判定は試験要件にない。設問2：時間を置いて測定した方がよい。設問4：最大径 30 mm 以下は使用できず、全長が 185 mm 以下となったものは使用できない。
14	1	設問1：天気についても必須記録事項とされている。
15	1	設問1：一般にコーン貫入抵抗から圧密降伏応力を直接求める推定式はない。
16	4	設問1：地中応力が解除され、残留有効応力に変化が見られる。設問2：機械振動を受け、攪拌状態に陥り、せん断変形が見られ得る。設問3：温度変化が生じて、強度変化が見られ得る。
17	3	設問3：対象とすべき飽和土層は 20 m 以下で細粒分含有率 35 % 以下の土を考慮する。
18	2	設問2：支持機構（先端支持、摩擦）を同一とする。
19	3	設問3：改良出幅 b_1 と改良厚さ D の比から $\tan\theta = b_1/D$ で求める
20	4	設問4：砂質土 > 粘性土 > ローム > 有機質土 > 高有機質土（PEAT等）の順である。
21	3	設問3：短期許容ねじり強さを上回らない値であればよい。
22	1	設問1：鉄筋の引張応力度で抵抗する。
23	2	設問2：標準設計水平震度 k_0 は中規模地震動で $k_0 = 0.20$ 、大規模地震動では $k_0 = 0.25$ である。
計 算 問 題		0.027 m (2.7 cm)
記 述 問 題		・技術文章として構成が不十分な場合は、内容に応じて減点とする。 ・専門用語を含む誤字・脱字がある場合は、内容に応じて減点とする。 ・「資料調査・現地踏査・現地計測」の3項目を記載することが望ましいが、紙面の都合上2項目でも可。ただし、1項目のみ（例：現地計測のみ）の記述は減点対象とする。